



Title	榎井縁さんインタビュー：居場所は場所ではない
Author(s)	
Citation	臨床哲学のメチエ. 2014, 21, p. 26-39
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/40497
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

居場所は場所ではない



「たたかう国流」と呼ばれることがある公益財団法人とよなか国際交流協会は、その多彩な事業の中核の一つに居場所づくりを位置づけています。本インタビューでは、「居場所」に関心を持つ学生ふたりが、長年にわたって同協会を支えてこられた榎井縁さんといっしょに「居場所」を考えます。



大阪大学大学院文学研究科、臨床哲学研究室の院生で、
ザイニチ。

2010年度より、主に外国にルーツをもつ子どもの居場所
づくりのボランティアとしてとよなか国流で活動中。

えのひ ゆかり 植井 縁 さんインタビュー

横浜中華街の裏町生まれ。

小さい時は多様な子どもたちのなかで生きたために、人と違うことに違和感をもつ学校集団では強烈な排除を体験し、自己喪失感に長くつき合う。10代最後にフィリピンの草の根民衆運動に偶然に参加し、「社会構造」によって抑圧される“小さい人びと”的内なる力を知り解放の糸口を見つける。

大学卒業後は観光ビザでネパール王国に渡り、ソーシャルボランティアとして活動、帰国後その体験を元に「チベット難民児童奨学金」を設立、中学校教員をしながら、同NGOを現地チベット人教員と二十年以上運営。1990年入管法改定時には神奈川県国際交流協会で「かながわ国際識字プロジェクト」の事務局長をつとめ、被差別部落や在日朝鮮人など日本の非識字者を中心として第三世界のワーカー・支援者・関係者がつどう場をつくり、識字の現場を調査する。その中でニューカマーの問題に出会い、その後、大阪市教育委員会、とよなか国際交流協会などで外国にルーツをもつ女性や子どもとともに活動を重ねる。

現在は大阪大学未来戦略機構第五部門の特任准教授。日本で多文化共生社会をきり拓く理論と実践を、学生や教員とともに構築している。

大阪大学大学院人間科学研究科、
社会環境学講座福祉社会論専攻。

自立生活をしておられる障害者のヘルパーとして活動してきた。豊中市内で、引きこもりの人などを中心とした居場所提供事業にも関わる。

金 居場所っていう言葉とか、居場所を作るとか、社会に居場所を作るとか、広くそういうことについて特集が組めたらなと思っています。

それで、僕も国流「とよなか国際交流協会のこと」でずっとボランティアをやってきましたが、事業の体系の中に居場所という言葉をいれて取り組んでもういうこともあって、榎井さんのお話は前から皆聞きたがっているというのがあって。だから今回ぜひこの機会にというこ

何から話せばいいかなってずっと思つてたんですけど、ひとつやつぱりもう一回聞きたいと思うのは、榎井さんがどよなか国流に関わりはじめたきっかけと、そこからおおまかに、どんなふうに榎井さんが仕事をしてこられたなかで、とよなかが変わってきたのかということ。



榎井 国流ができたときは大阪の市教委

で働いていて、豊中にすごいものが出来ると聴きました。二十年前に「地球市民を創る」って。地球市民。かつこいいじやんて思つて。それでワークショットという手法がまだ日本で普及していない時代に、どこもやってないようなワークショップを次々とやつて。

金 どんなのですか？

榎井 子どもの権利が批准されて間もなかつたと思うのですが、それを国内で推進する人たちが関わっていましたね。子どもの権利って、頭じゃなくつて、身体がほぐれないで大人はわかんないじやんなか国流に関わりはじめたきっかけと、そのときどんな状況だったのかということと、そこからおおまかに、どんなふうも得てなかつた。

ただ地域住民とのズレはあつて。宇宙人が来たみたいな違和感。海外経験をした人たちが、英語などを使って留学生支援をするような国際交流が望まれていたのかもしれないです。

わたしは初代の人たちの直後にリクルートされたので、怨みやつらみが残つているように感じました。たぶん理想が先行したのでしようね。その上その頃の行政の影響も強かつたので、予算を取つてくる、予算を消化することがダイジなんです。平等主義的に「あれもしますこれもします」という感じでした。一体何を大事にしたいのかわからないのが平等みたいな。豊中市は当時「人権」を政策に掲げており、国際交流協会もその傘下で設立されたのですが、男性性や権力性みたいな。豊中市は当時「人権」を政策を持ち合せた組織でもあつたようで

たち。立つたりとか体を動かしたり、人と触れ合つて話すとかいう研修を一回も体验したこと無いから、頑なに立たない。みたいな時代に、それを私が覚えてるだけで月に三十回くらいガンガンやるつてなんという不思議な場なんだろうと思つたんです。

す。

でなにか事業を変えるきっかけとして日本語教室に来ている外国人に、アンケートをしました。どうですかって。ほとんど満足してますって回答でした。一番最後に「あなたは日本語をどこで一番使いますか」という質問があつて。その時の日本語教室は、専門の先生が安く効率よく日本語を教えてだいたい二年で、使える日本語を教える方針でした。いかに早く勉強して地域で日本語を使えるかを目標にしていた。でも、一番最後の回答、何だつたと思いますか、どこで使うかって質問。ほとんどの回答はセンター（ここ）って書いてあつたんです。

「ここです」って書いてある人は、地域で日本語を使っていない、使える相手がない。やるべきことは、話せる相手を探す方、日本語を教えるほうじゃなくって。日本語勉強しても使うところがここしか無いってことは友だちがいるんだから、友だち——いわゆる日本人とか、普通に私たちが地域で会つていそな人と、ここで会わせないとつて考えたんですよ。それで、九人いた先生に、「九

教室あるから、一つだけこちらでやりたい」と。皆さんのやり方はいい、やつてください。すごい満足度が高いから。でも一個だけ、先生だけじゃなくて地域の日本人がごちゃごちゃいっぱい来そうな日本語教室をやってみたいと、相談をしたんです。

そしたら年度末ぎりぎりになつて九人が来て、「すいません榎井さん、全員やめさせてもらいます」って。寝耳に水状態になりました。つまり、一個つてなると、誰が辞めるのかっていうのが嫌だったというのが一つと、全員辞めたら困るだろって（笑）、そこではじめてあのとよなかにほんごつていう、今の形になつたんですね。

なんていうか、優等生な外国人を創る装置としてのとよなか国流にだんだん気がついてきたわけですよ。海外でお世話をになつた人がお世話してあげるという「やり方が」、非常に教育的だつたりするわけです。南米の子どもは、コーラとか小さい時から普通に飲ませるじゃないですか。説教してましたね。当人になつたら習慣ですから余計なお世話ですよね。

それから、二〇〇一年にDV法ができる、DV相談が始まります。全国でいつせいに外国人のDV支援をするホットラインの日 nichoを決めました。関西でも幾つかの団体が協力して実施しました。医者や弁護士、通訳が一同会して相談電話を囲むわけです。でもかかつてくるわけ無いじゃないですか。

そのとき協会は会場と、たまたま電話のラインが一個空いていたので、電話番号を提供したんです。相談日が終わった後から、ポツポツとDVの電話が掛かってくるようになつて。必然的にDVの相談を始めないとけなくなつてしまつた。専門家がいなかつたので、私と具さん「元職員の方」が一個ずつケーススタディをしながら手弁当のような形でやつていた。色々なケースがありましたね。一人、家族からの暴力で家に帰れないと、家族からの暴力で家に帰れないブラジル人のお母さんがいて。ブラジルで教育を受けてなくてポルトガル語の読み書きができない。世界が違うじゃないですか。文字の世界の人は抽象的な思考ができるので将来計画を立てることが

です。でも一生懸命で感情豊かで。毎日来るんです、でつかい荷物を持って。いくところがないから。毎日国流に来て、具さんとか気を使つてコーヒーを入れて、コーヒーを飲んで。エレベーターの前のタバコ吸えるところでタバコ吸つて、散々泣くんです。ため息をついて、「はー」って、帰つていく。で、また次日来るんです。それが続くわけです。勿論相談されるので、こうしたらしいよとか、このためにはこういう風にしたらとか、あそこ行つたらとかアドバイスする。流石に数週間経つて、何をやつても無理とすることが解つてくる。

結局その人を矯正したいわけです、私たちは。ちゃんとしてあげたい。でもその人にとつて、欲しかったのは「ただいる場所」だつたんです。「こうしるああしろつて言われたくない。いられる場所がほしい」つて。その時、アンランつていうか、ここは外国人の場所のようを見せかけて、実はそうじやないんだと。外国人を日本的に、私たちが思うように矯正して地域に送り出すみたいな場所だつて。

金 僕が入つた時にはそれなりに「いて



なんでその人がいる場所がほしいつて言つたか。いていい場所がない。要するに有徴なんですよ。そういう人たちを作つてある。一つだけすごくわかつたのは、公的な——「公的」つてなに? つて話になるけれども——少なくとも外国人は公的な場所からは排除されている。単に外国人がいていい場所なんて一つもない。多分公民館にもいけないだろうし、図書館でおじちゃんたちと一緒に新聞を広げることも出来ないだろうし、公園デビューも出来ないっていうのも知つてたし、つていうことが、それはどういうことなんだろう? つて。その国流つて、私がいる間に、本当に周縁化されたりとかマイノリティとか女性とか子どもとかつて言いながらも、本当にその人たちがいていい場所になつてるかどうかかつていうのはやっぱりあつて。いていい場所つてことは自体をもうちょっと今は疑つているんだけれども。まあそんなことかな。

いい場所の文化つていうのは出来てたと思うんですね。それも全然一筋縄では行つてなかつたんやなっていうのは聞いて思つたんですけれど。

榎井

これもちよつと脇道に入つてしまふけれど、ふあよんにとつてはすごい大事なことで。やつぱり在日の職員がいたつことは大きかった。在日の職員は、見えますからね。隠れられないつていうか。そこでやつぱり体張つたと思ひます、彼はある意味自己投射して、弁護していましたから。女性のことに関するなんだろう? つて。その国流つて、私も、さつきの彼女のことに関しても、含めて。一番話し聞いてたのは貝さんですからね。相手してたのは。それはすごく大きく。今は金さん「現事務局長の金相文さん」がいるんですけど、やつぱりいることって大事なんです。

夏にあるセミナーがあつて、障碍者差別法のことをずっとやつてきて色んな裁判をやつてきた弁護士さんが同席してて、私が在日の子どもたちの「いるのにない、いないのにいる」話をしたら共感してくれました。これは私が外国人教

育の問題についてそういうフレーズを思いついたんです。もちろん「いる」。例えれば学校の中に在日の子がいたとしても、ないように扱われる。あるいは、それを逆に言うと、もともと日本の学校なんだから、在日の子は「いない」はずだ、というところにいる。だから「いるのにいない」と「いないのにいる」は一緒なんですね。その話をした時に、それはインクルージョンの、障碍を持つてゐる子どもと全く一緒だと。いるのにないとされる。いないはずなのにいるっていう。そこに隔離っていう話があるけれども、同じようなことが起こっているねっていう話でした。そこをおさえずに外国人の問題はできひんと思つてましたね。在日の問題と、目の前の、「言葉ができるない」みたいな問題とを繋げないといけないと思つていて。最近なんかこの、『レイシズム』『レイシズムスタディーズ序説』(鵜飼哲、酒井直樹、テッサ・モーリス＝スズキ、李孝徳共著、以文社、二〇一一年)にはまつていて(笑)。これまでにそのことをずっと言つてゐるんですが。結局つなげて考えないというの

は、為政者にとつて非常にやりやすいつたつたんです。もちろん「いる」。例えれば学校の中の在日の子がいたとしても、ないように扱われる。あるいは、それを逆に言うと、もともと日本の学校なんだから、在日の子は「いない」はずだ、というところにいる。だから「いるのにいない」と「いないのにいる」は一緒なんですね。その話をした時に、それは植民地主義だつたりとかレイシズムであつたりとか。根っこはやつぱりそこにあるんだなっていう話ですね。

金 とよなか国流のスタッフと、ある被差別部落だった地域で活動されている団体の方と一緒にファイエルドワークをしたんですが、ちょうど被差別部落だとされるところと違うじやないところの境界、団地と向かいにある道路のあいだにフェンスがあつて。そのフェンスは、もう昔の話なんだけれども、こつちは私たちの

ところだと、被差別部落の人たちとは違うんだということを証明するためにあつたフェンスで。もう取つ払つてもいいんだけどおたがいの対話をなしに無理やり行政で取つ払つてもしやしないから、今まで残してゐるんですけど、空間ではないって話なんです。

空間としての場所つていうのはすごく危なくて、さつきの話ですよね、どこまでが自分のもののかつて。植民地も先住民も違うじゃないですか。場所を所有していくことによつて、あぶれしていくものが居場所を、逆の意味で居場所を探していくつていうときに、居場所つていうのは、なんていうんだろう、場所の所有のアンチテーゼというか。次元が違つていて、安心できるとか、いていいとか、

どう言つたらいいかわからないんですねけれども、他者からの承認みたいなところが初めから剥奪されているなかで、それを取り戻すためにどういう風にしていったらしいのか、という一つの手段であつて。

マジョリティは居場所つて使わない。居場所つて場所を追われている人たちの、場所へのアンチテーゼみたいなイメージの場所。なので、空間じゃなくつて。場所じやなくつて吹き溜まりみたいな

「お前いた！」みたいな積極的な承認ではなく、「いて当たり前だよね」、みたいな対話がなされる。「いるのにいない」じやなくつて「いるのにいる」みたいにな。そういう……なんて言つたらいんだろう、空間ではなく。頭のなかでいま整理ができるんですねけれども。

金 僕自身が国流に吹き溜まつてることをすごく思つていて。僕が関わっている「サンプレイス」の活動もボランティアとして子どものために居場所を確保しているんだみたいな、そういうことじゃ全然ないんですよ。僕もそ

だし他のボランティアもそうで。どつちかというとほんとに、子どもと一緒に遊んでるし、一緒に勉強してるし。そんなのへんにあの人いるよね、みたいな。わんにかかるでしょ？ この人はこのへんにいるけど、こぼれるつぶやきを拾つて、それをどうにかできるわけじゃないけどボランティアとみんなで話し合つて悩むとか。そういうことをずっと、三年続けて

きて。結局なんか、使命感みたいなものを第一の理由にして国流に行つてないんですね、自分が。行きたから行つてるし、そこにいる人たちに会いたいから行つてるし、人たちっていうのは子どももそうなんです。それは自分のそれまでのことを考えると、やっぱり場所がなかなかつたなという風には思うんですね。でもそこにあるよね、何であるのかなつて言つたら、たぶん歴史だと思うですね。歴史と文化。それはたぶん、さつき言つた、DV被害者もそうだし具さんもそうだし。私もきっとアクターだつたと思うし。そこにできた、なんていうんでしょうね、国流つていういわゆるプレイスとかいう場所ではなく、なんかその、ものが絡みそうなところ、みたいな。

榎井 その時の場所つていうののイメージが、やつぱり吹き溜まるというか、ちょっと絡むというか。色んな物に絡まれている自分がこうあるというか。空間としての場所ではなくつて、こういう子どもがいて、なんかちょっとこう自分が絡んでいて、それぞれ居場所つて一個

じゃなくつて、全然違つて。たとえば

井筒 吹き溜まりつていうことばに、私

もすごく、感覚をします。私は大学を出でから、いわゆる自立生活支援センターつていう、脳性マヒを中心には活動するための支いる人たちが、地域で活動するための支援をするNPOについて。そこが、まあ吹き溜まりって言えば吹き溜まりだったんですよ。その設立をした方も、なんで設立したかつて言つたら、地域の障害者が溜まる場所が欲しかったからつくったと。

僕自身去年はそこで働く日が一日とか二日とか週にあつたんですけど、それまでは基本的に直接在宅の人の家に行つて帰つてくるという仕事をしてたんですね。それはやっぱりきつかったんです。誰かとはいるんですけど、独りだなつて感じる時がすごく多かつたんですね。で、その、皆が集まつて飯食べて、外出活動するための計画を立てたり、そういうことをやりながら、ほんとに何もしない時間もあつて、そういうときは利用者さんとふたりでタバコ吸いながらはあみたない、昨日テレビどうだつたみたいな話をしたりとか、恋愛相談をしたりとか、

しながら回つててつていう時間が樂しきつたし、やっぱりすごく安定したんですよね、僕も。去年一年間ははつきり言って生活は厳しかつたんですけど、そういう場所が確保されてただけで、すごい安定して楽しく過ごせたんですよ。

やっぱりそれつていろんな説明の仕方があるとおもうんですけど。僕は、やっぱりヘルパーではあるんですよ、当然その仕事はするんですが、ヘルパーとして仕事はしてないですよね。友人であつたりただ横にいる人として、ちょっとアレ取つて、ちょっとトイレ行くから手伝つて、タバコ吸うから外出てきて、はいはい、という感じでやると。それは、なにか明確に何かやることがあって、それを達成することじやなくて、その場その場で起こつたことに、流れに乗ると。それほんとに、ヘルパーと利用者の関係のみがそうであるというわけじやなくて、利用者同士もそうだし、ヘルパー同士も

そうだつていう、何をやつてもいい空間で、楽しく日々を過ごすという場所が一箇所出来たつてことで、やっぱりすごい救われる感じがしたなつていうのは

あつて。

榎井 なんかたぶん、居場所つて場所のオルタナティブだと思つんですよ、絶対に。吹き溜まりって言つたんですけど、吹き溜まりのいいところは多分、なんて言つんでしよう、この人は何者とか聞かなくて済むとか、ここに来たらこうしないといけないことがないとか。それってなんだろうつて考えたら、そうじやない関係つていうのは力が働いてたりとか、私はこういう者ですと言つて仕事をしないといけないとか。やっぱりそういうことから解放されるっていうのを、特に普段、力に無自覺の人は解放されないままにいつもの場所にいると思うけれども、そういうことに自覺的というか、それをを感じざるをえない人たちにとつては、やっぱり必要な場所のかなつていう感じがしますよね。

金 サンプレに來ているある子どもは、最初センターに繋がつたのは日本語だつたけど、たまたまサンプレのボランティ

アと繋がるようになつて。日本語も行きつつサンプレーにも来るようになつて。二〇一〇年に初めてやつた「たぶんかミニよなか」で、本格的に子どもと一緒に何かするつていうことを一緒に出来た。そこからは毎週毎週、ボランティアよりも休みなくサンプレイスに来るようになつて。そういうことを見ると、事業としてサンプレーつていう場所を取り敢えず居場所づくりの活動つて言つてゐるけれど、サンプレーが居場所なんじやなくて、センターとか、とよなか国流の人たちつていう、もうちょっと大きい括りで居場所になつてるんやなと思うし、そういう風に子どもを色んな所につなげてみたりとかするつていうのを、僕は去年一年、仕事をみんなと一緒にやつてみて、本当にそういうことに気を配つて意識的にやつてるんだなということは、よくわかつたことなんですね。



金 一方で、例えば今の日本語のボランティアさんの人たちとか、どこまで日本

語のその活動以外のところとつながつてゐるのかというのは、結構難しいところがあるなと思つて。だからこそ、哲学力やとかさんかふえとか、そういうところを創つてみると、子どもがそういう風に色んな所につながつて、協会全体を居場所にしてくれてる、つていのと、またちょっと似てると、なんかふえを通じて別の事業とか別の人とのつながりが生まれたりするのかなつていう風に、今話を聞いててちょっと思つたんですけど。どうですか？ なんかふえとかつて、国流のなかではどんな風に位置づいていますか？

榎井 多分、今日本語事業の話をしたんだけども、日本語事業はまず形から入つてるので、形から脱出できないといふか。だからモヤモヤとした、藻場みたいなどころがほしいなつていうのがあつて、「そこに来れる人が来る」のは、結構面白いつて。混沌とした作りつていうのは、ほそぼそとずっと続いていて。哲学

カフエもさんかふえも。そこをすごく大事に思つてゐる人たちがそれぞれ違つてゐるつていうのがまたいいなつて思つますね。うん。やっぱりそこに、それを求める人でありますのは、気がついていく人であつて。いま、じゃあ日本語ボランティアに「さんかふえ出なよ」って言つても、義務になるという部分で、やっぱりこう、行きたいなどか、居てたいなとか、話したいなどかつていう人が、ぜんぜん違う部分から来る。どれだけそういうところを増やしていくかみたいなところが勝負なのかな、つていうのは、思ひますね。

で、子どもはなんでそういう風に行つてゐるかつていつたら、やつぱり、うん、その子たちがそれなりに乾いてるから、だと思ふんで、乾いてるつていうか、うん。まあ求めてるつて言えば求めてるかもしれないし、乾いてるつちや乾いてるかもしれないし、奪われてるつちや奪われてる。



を必要としている人とか、徘徊する老人とかもそうだと思うけど、いわゆる社会的に居ないほうが楽とされている人たちが居るために、居続けるために必要な力、

とか、安心感とか、居ていいんだとか自己肯定感とか承認とか、自尊でもいいんですけども。なんかそういう、なにかそ

の、しきみが、居場所なのかなっていう。

なので、対話が必要、ていうのが出てく
るのかなっていう。



金 これ、訊こうか躊躇つてたんですけど……。

榎井 どうぞ。

金 うん……。そうですねなんかこう……、うーん、出て行つてまた戻つてこれるつていうか。

榎井 うん！ 余白をず一つと旅してて

もいいと思うんですよ、子どもとかね。

どつかでなんか中入つてもいいし。そのまんま行つてもいいし。

でそういうなんか、その世界も認め

てほしいっていうのがたぶん、居場所つ

たってっていうのは、たぶん、そこを認めて

ほしいっていう何かがいるんだろうな。

たぶん、中の人たちが、やつぱり変わつてほしいって思うわけじゃないですか。

金 とよなか国流つていうばしょは、榎井さんにとって、居心地のいい場所になつてたかな、とか。それからどうかにやつぱりほかの場、とか、あつたのか……。

榎井 いや、他はなかつたので、居心地がいいつちやいいかも知れないけどなんか、すごいあそこは闊いの場だつた。闊いの場つていうのは、「女」みたいなことを思い知らされたりとか、社会的な権力的なところと接点があつたりとか、市民からの突き上げがあつたりとか、外国人も仲良くなればなるほど、「あんたは日本で生まれてこんなんだし」みたいなものもあるし、自分がいろんな意味で確

認できた場所。居心地が悪くはなかつた。自分の中のマジョリティ性とマイノリティ性がよく見えた場所です。つまり誰を前にして語るのかによつて、まつた違う自分が見えてくる。でもよかつたのかなあ。悪かったのかなあ。どういうのが居心地がいいっていうのは分からなくつて、私の居心地のいいっていうのは、なんか、ずっといろいろなことが考えられるとか、ずっとなんかこう怒つてられるとか、ずっとけつこう闘つてられるみたいなのが、いいのかもしんないなつて。社会がみえるとか世界がみえるというのはすごいおもしろかつたですね。

あと私は、神奈川県の出身なんで、同じような場所にいても、なんかその、こじんまりとしたよさつていうか。神奈川とか東京つて相手がでつかすぎて、歯がたたないっていうか。ある一定自分が自分の足でいろんなことができたりっていう意味ではすごいとよなかおもしろかつたですね。

役所からも、教育委員会からも、一目を置かれてたりとか、発言権があつたりとか。そういう意味ですごくおもしろい

というか。なんかやつぱり、変な意味じやなく人間で政治的なんだなって思いますね。たんに居場所だけをやつてる、つて人たぶんいなくつて対局、対抗するような勢力とか、主流とか、なにかあつて、そこにアンチ的にやつてると思うんです。私にとつたら、このとよなかをやりながら、何が社会といわれているもののかつていうのがすごくよく見えて、おもしろかつたですね。

構築主義とか、カルチュアルスタディーズの人たちを呼んで「アンラーンシリーズ」を企画したときにぐわーっとのめり込んでそれといまの自分たちの置かれてる場所とか自分自身とかつていうのはわりとすっぽりあってはまつていきながら事業を開展していくたのであんなふうになつたんだろうっていうかんじですね。だから、居てて、まあそういうなんか悔しいとかなんちやらとかいつぱいあつたけれども、居心地の悪いことはなかつた。うん。充分におもしろかつたですね。

それといつしょにほんとに現場の、子どもたち見て、頭を悩ませ。子ども事業ですね。

できたいろんなこととかDV被害者の話とか、いっぱいおどろおどろしく現実は、あるわけで。うん、その、なんのためになつてるかつていうあたりも、絶対にやつてたから。あそこにいたら、なんか、ものがうまくいかなければいけないほど、おもしろいというか、こればかりはほんとに社会だなあと。不条理なことがあればあるほどそだなあと。

井筒 現場にいることでぶれない……ぼくもぶれなくなりたかった、いまでもなりたいんですけど、やつぱりその「ぶれ

ないためには場はいるなあとずっと思つて。ぼくにとつては介護をずっとやつていくことがたぶんぶれないためにはすごい重要で。

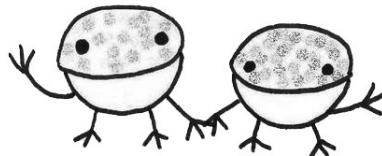
何かとして型にはまらないつていう場が必要だよねつて話が出ていた一方で、自分が自分としてはどこかでやつぱりぶれない、というか、なにかやりたいということはあるわけですね。

たぶん、子どもたちのパワーっていうのは、私は居るよつていうところに最後いくと思うんですね。学校の中に自分は居る。で、そこで、ぶれないつていうとおかしいけど、そこで自分が自分でありますまきとか、たまりばとか、吹き溜まりとかつていうのはたぶんあるべきなんだろうなつていうのは思つていて、もししたらその、これつて現代的、近代的なことかもしれない。その辺は私はちゃんと勉強してないから分かんないけど。

金 自分が自分でありつづけるつていうのは、自分の矛盾でいうのに正直でいられるとか、なんかそういうことなんか一と思つて。ぶれないつていうのも、こう、何かをするために、なんか自分を抑圧してがんばるつていうのとはまたなんか、ちがうんかな、と……。

榎井 うん、逆だと思う。逆だな。ぶれないつていうのは、自分、が、変わつてもいいんですよ。変わつてつてもいいけれども、「魂売らない」みたいな。

うん、あの、たぶん売りたくなることがいっぱいある。あるじゃないですか。でも、いつたいじやあなんのためにやつてんの、ついていたときに、いろいろ具体的な人の顔がちゃんと出て来るというか。やっぱり自分の生きてきたなかで出会った人、なんですよ。社会問題という漠然としたものがあつてこれはおかしいとか言つてるわけじやなくつて、なんであの子はあそこで死なないといけなかつたのかとか、もう、もうほんとに具体的に、そういう話、なんですよ。なんかそういうことちゃんと大事にしていく自分でいたいなっていうのすごい思いますね。



とよなか国際交流協会の様々な活動に関しては、ぜひホームページ (<http://www.a-atoms.info>) や Facebook ページ「とよなか国流」をご覧ください。

ちなみに、本インタビューに登場してくれたのは、とよなか国際交流協会のキャラクター、コモとスースです。実際に国際交流センターに行くと、いろんなコモとスースに会えますよ。

インタビュー後記

今回のインタビューのお誘いを受けた時、テーマが「居場所」であると聞いて二つ返事で参加を了解したのは、そのときの私にとって「居場所」という言葉から想起されるものがいくらか鮮やかなものとしてあったからだった。そうであったはずなのに、その後改めて「居場所」について考えようとしても、不思議とあまり多くのことが思いつかない、ということがあった。その時は、なぜ自分がそうなのかが、よくわからなかった。／ただ今回のインタビューをとおして、この、私が「居場所」をあまり良く語れなかつたことの理由がすこしわかったような気がする。それは、榎井さんと金くんにあって、私にはないものとして、インタビューのなかに、あらわれている。／お二人には、「私にとっての居場所」に加え、「あなたにとっての居場所」、「彼／彼女にとっての居場所」という視点と、居場所をつくる・まもるという意志と実践があったが、私にはそれらがなかった。言ってしまえば、私には、「私にとっての居場所」を享受したという経験しかなかったのだ。居場所という場、あるいは状態の脆さや（字義通りの）有り難さを、単なる偶然的産物だとしか捉えてこなかつたのである。たしかに「私にとっての居場所」というものをとおして、私は、自信やよろこびを受け取つた経験はあった。しかしその鮮やかな感覚も、どこか、喉元すぎれば、という感じで色あせてしまったのだろう。このように、私の居場所という視点しか持ち得ないと、居場所を消費してしまう危険、というものができるのかもしれない。／最近になって私も、居場所をつくる活動にいくつか参加するようになった。そのため、お二人が格闘しておられた居場所というものをその存在の特性に応じた形でいかに育むかという課題が、私にとっての課題にもなりつつある。おそらくこのことは、私に新しく居場所を語る言葉を与えてくれるだろう。そうなつた時にまた、今回のようなお二人とお話をできる機会に恵まれれば、と願つてゐる。（井筒）

このインタビューで、榎井さんが長年にわたってとよなか国際交流協会で実践されてきたことのエッセンスがお伝え出来たかと思います。／特に印象的なのは、「居場所は場所ではない」という言葉です。居場所をつくる・居場所になることは、場所の占有の問題ではなく、居場所とは承認の場であり、承認されることのうちに居場所はあるのです。とよなか国流が、センターを常に外国に繋がる人びとの承認の空間としてひらいてきたことが榎井さんの言葉には表れています。／また、「現実」の「肩」に余白を作っていくという発想も大切に感じます。「吹き溜まり」は「現実」から完全に分かたれたものではなく、「現実」と自分自身との関係をとらえなおす場所、また継続的に力になり合える人間関係をつくる場所にもなるでしょう。生活時間の大部分を占める場所で生き延びるために、完全に切り離されないその「肩」に吹き溜まりが必要なのです。／余白をつくり維持することのたいへんさと、それでも長年「ブレない」活動を支えてこられた榎井さんのパワーが、インタビューから伝わってきます。そして、自分の「在日コリアン」ということにそれなりにこだわってきた私がこのインタビューでもらつた元気は、今も私のどこかで脈打っています。
(金)